両周金文研究会会報　第３号　pp. 7-11，2024 年度

「庸」字についての初歩的考察

鄧　喬丹

はじめに

「庸」と言えば、多くの人がいわゆる中庸の「庸」を連想するであろう。しかし、「庸」そのものの語義について理解している人は少ない。

「庸」について、考古学の分野では、主に古代の楽器としての「庸」に注目し、その本義や内包される意味の研究が行われてきた。一方、思想界では、「庸」を「中庸」の構成要素として扱い、「中庸」という概念の解釈を目的とした研究が主であり、「庸」一字に対して包括的かつ独立した考察を加えた研究は比較的少ない。

本稿では、「庸」の甲骨文字における字形の分析を起点に、字音・字義との関連を踏まえながら、その本義を楽器、特に鐘類の一種として位置づける可能性を探ることを目的とする。先行研究を整理しつつ、出土資料および古代文献の比較検討を通じて、「庸」の原初的意味に迫る。

１．先行研究

「庸」字について、初文の解釈については本義の捉え方の違いにより、現在広く認められている説は三つある。

第一の説は、白川静氏（1984）をはじめとする学者の間で唱えられてきたもので、「庸」は本来、城壁や要塞のような防御施設、すなわち「城郭」を意味したとする。この説は、字形に着目し、甲骨文や金文に見られる「庸」の構造が建築物を模したものであることを根拠としている。高景成氏（2008）は、甲骨文における「庸」を城郭の形としており、すなわち城壁を象った円形または方形の枠に、高い屋根の形を上下または上下いずれかに加えた形とする。また金文および小篆においては、上部に「庚」、下部に「用」を組み合わせた字形であると指摘する。康殷氏（1979）は、「庸」を「京」「高」「墉」「郭」「城」などと共に建築類の文字に分類し、その意味を「居住の場所」と解釈している。「 」（合集 6169）は城郭の形を象っており、甲骨文に見られる四隅に二対ずつ向かい合う望亭（見張り台）は、簡略化された四つの望亭の形であるとされる。卜辞では、天が明けようとする時を指し、のちに「庸」「墉」という字が派生した。両字は古くから音が近似している。

第二の説は、学界でより広く受け入れられている見解であり、それは「庸」を「鐘」、すなわち殷商時代において祭祀や儀礼に用いられた大型の楽器を指すものとする。この見解は明代の楊慎『升庵経説』にもすでに言及があり、「庸」は本来、鐘の類に属する楽器であったとされている。ただし、楊慎の見解を近代的な学術研究と同列に扱うことは難しく、あくまで先行的見解の一例として位置づけるべきである。谷衍奎氏（2003）は、「庸」は会意字であり、甲骨文「 」（合集 20592）では「用（使用）」と「庚（楽器）」を部品として構成されていると考える。そして、大鐘という楽器を使用するという意から、動作としての「使用」の意味が派生したとする。これは「鏞」の初文であり、また「鏞鐘」が日常的に使用されるものであったことから、「平凡」「平常」といった意味にも転じたとしている。李純一氏（1964）は、「用」「庸」「甬」から出発して鐘の名称の変遷を論じようと試みており、「庸」が大鐘を意味するという説に賛同していることは疑いない。さらに、李氏（1988）は「庸」がいかなる楽器の名称であるか、およびその機能について検討を加えている。楊福泉氏（1994）は「庸」についての専門的な考証を行い、その本義が楽器の一種、すなわち「鐘」であることを証明しようとしている。陳致氏（2008）は殷代の祭祀における楽舞の検討において、殷人の間にすでに「万舞」と「庸奏」の概念が存在していたと述べている。この論文は、「庸」が日常的に使用された楽器で

あったことを示すだけでなく、「庸」がその伴奏によって行われる大型の舞踊・音楽および儀礼そのものを指し示す語でもあったことを指摘している。

また、落合淳思氏（2016）も同様に、「庸」は鐘類の楽器を表す字であると明記しており、これは現代の文字学的研究において有力な見解とされている。一方で、王輝氏（2008）には「庸」の音通使用例は見られないが、これは逆に「庸」が通仮的な借用の対象とならなかった、独立した音義体系を持つことの傍証とも考えられよう。

第三の説は『説文解字』を代表とするものである。『説文』（巻三・用部）では、「庸は用いるなり。庚に従い、用に従う。庚は事を更うなり。余封の切。『易』に曰く「先庚三日」と」と記されており、「庸」は「用いる」ことを意味するとされる。于省吾氏（1979）は、「庸」は「用いる」の意であり、人に使役され用いられることを表すとし、「庚」と「用」から構成される文字であり、「用」は音符でもあるため、会意兼形声文字であると考える。沈長雲氏（2000）も同様の見解を示し、『詩経』魯頌・閟宮の「土田附庸」という句を例に挙げ、その意味を実証している。

以上のように、「庸」の語源および本義については複数の説が存在するが、本稿ではとくに第二の説、すなわち「庸」が古代の鐘類楽器であるという見解に立脚し、出土文字資料および音韻体系を通じて、より確かな根拠を提示したい。

２．「庸」の本義と語義の整理

（１）二つの字形

「庸」という字の起源については、現在も議論があり、甲骨文字における異なる字形が主に二種類存在し、「 」（合 6169）と「 」（合 20592）である。

第一の字形を支持する学者は、「庸」の本義は建築物や城壁、城郭などに関係すると考えている。なぜなら、その字形が院落（囲まれた敷地）の構造に似ているからである。しかしながら、近年の文字学的研究においては、合集 6169 の字形を「庸」とする比定に対して再検討が加えられている。たとえば佐々木研太氏（2025）は、この字形はむしろ「亳」と隷定すべきであるとし、語義や文脈の観点からも「庸」とは明確に区別されるべきだと主張している。この見解は、同形異義の誤認を避けるうえでも重要な示唆を与える。

より多くの学者は第二の字形を支持しており、筆者もこの第二の字形こそが「庸」の原形であると考えている。陳致氏は、さまざまな甲骨文字および各種の考古資料を総合的に検討した結果、「庸」の甲骨文字の字形は第二の形であると結論づけている。陳氏は、「 」（合 20592）という字が甲骨文の卜辞の中に繰り返し登場し、多くの場合、音楽や舞踊を表す文字とともに現れていると考えている[(1)]。

本稿は陳致氏の見解を支持するものであるが、彼は「庸」の本義の推定について、詳しく論じてはいない。以下では、「庸」の字音および字形の両面から、その本義を深く考察していく。

（２）字音からの考察

上記のように『説文解字』によれば、「庸」は「庚」と「用」から成り、「用」は声符でもあるとされており、その切語は「余封切」である。『上古音手冊』（唐作藩 1982）によると、「庸」・「鏞」・「用」・「甬」はいずれも上古音で東韻・喻母に属し、それぞれ *luŋ, *luŋ, *loŋ, *loŋʔ などとされ、これらの語は音韻的に相互に通じていた可能性が高い。また、「鐘（鍾）」は *toŋ と再構され、これらとの関係性が推測される[(2)]。Baxter & Sagart（2014）による Minimal Old Chinese の体系では、「庸」は *(q)loŋ または *(q)juŋ と再構され、音韻的にも鐘類との連携が指摘できる。

朱駿声による『説文通訓定声』（豊部第一）では、「庸」「鏞」「用」「甬」「鐘」「鍾」をいずれも豊部韻に分類している。これにより、東韻に属するこれらの字が上古音において音が近く、意味の通用があったことがうかがえる。

『説文通訓定声』は「庸」を釈する際、「家大人説く、庸は鏞の古文。庚は栒虡を象り、用は鐘縣を象る、と」という説を引用している。

したがって、「鏞」の意味から「庸」の意味、すなわち現代でいう「鐘」を推定することができる。しかし、ここで指摘しておきたいのは、これらの楽器はいずれも「鐘」と関係があるとはいえ、出現した時期は異なり、種類も一致せず、また用いられた社会的地位にも差異があるという点である。

「庸」はおそらく、「用」が変化・装飾された形であり、「用」の甲骨文字は中空の竹を断った形を表している。古代の人々が中空の竹や木を打ち鳴らしてリズムを作ったというのは十分に考えられることである。このことからも、「庸」という字の造字当初の本義は、このようなリズム楽器がさらに発展した形、すなわちやや大型の鐘類楽器であったと考えられる。

（3）字形からの考察

甲骨文から金文、小篆に至る字形の変遷を見ると、「庸」が「庚」と「用」から構成されていることがより明確にわかる。「庸」が「庚」と「用」に従うという構形は、すでに学界で広く認められている。

以下では、「庚」と「用」という二つの構成要素から出発し、「庸」の本義を探っていくことにする。

「庚」の古義は考証が難しいが、上引のように『説文通訓定声』には「庚は栒虡を象る」との記述がある。『説文通訓定声』（壯部第十八）の「庚」の釈義には、「庸はこの鐘に従う。栒虡はその形のごとし」と引用されている。

楊福泉氏は、栒虡とは「鐘や磬を収納または懸架するための架台」[3]であると考えており、したがって「庚」という構成要素は、「庸」の意味を楽器の方向へと導いていることがわかる。

周斌らが主編した『古代漢語字典』では、「庸」は「用」と「庚」から構成され、「用」と同源であるとされている。「用」は「庸」の構成要素であると同時に同源語でもあるため、「用」の古義を通じて「庸」の本義を探ることは、合理的かつ科学的な方法の一つである。

前述の字音による本義の考察において「用」について簡単に触れたが、ここでは字形の観点から「庸」の本義をさらに詳細に論じる。特に注目すべきは、楚の青銅器の銘文において「用」と「甬」とがしばしば通用しているという点である[4]。

実際、「用」と「甬」は金文において、その字形が非常によく似ている。

「用」の字は金文では「 」（集成 2763）、中が空洞になった器物の形をしており、打楽器として用いられた中空の竹や木を象っていると考えられる。「甬」は金文では「 」（集成 4302）の形で表され、「鍾（鐘）」を象った象形文字である。字形の上部にある小さな円と点は、吊り下げるために鐘の頂部に設けられた円形の鉤（フック）を表している。

「用」と「甬」は古代文献においてしばしば通用されており、字義も当然ながら互いに近く通じている。この現象は、「用」がもともと古代の楽器であったことの有力な証拠の一つである。また、「用」と「庸」は同源の字であり、音も意味も通じ合うことから、「庸」もまた楽器の一種、すなわち「鐘」に属する楽器の一種であると考えられる。

また、「用」の甲骨文字形は「 」（合集 15420）であり、中が空洞になった竹の節の形状に非常によく似ている。古代中国では、竹の節を楽器として用いる伝統が古くから存在していた。李純一氏（1964）も、古代人が最初に音楽を奏でたのは、折れた竹や、それを加工した容器のようなものを打ち鳴らすことから始まっ

た可能性が高いと述べていた[5]。このことから、「庸」は一種の楽器を指す語であると推測される。甲骨文における「[illegible]」は、当初は竹や木で作られた楽器であったが、殷商時代には青銅製の楽器へと発展した。製作材料は生産力や技術の進歩に伴って竹木から青銅へと変化したものの、国家の祭祀や礼楽制度におけるその重要性は変わることがなかった。

終わりに

本稿では、「庸」と釈される甲骨文の字形の比較、および「庚」「用」「甬」などの関連字との音韻・形態的連関を通して、「庸」が古代において鐘類を含む楽器を指す語であった可能性を考察してきた。とりわけ、「庸」が礼楽制度において中核的役割を果たした青銅製楽器として発展した過程を解明することは、単なる字義の探求を超え、古代音楽文化の実態に迫る手がかりとなる。今後は、より多くの出土資料や地域的差異も踏まえながら、「庸」と礼楽・祭祀との関係についてさらに多角的な分析が求められるであろう。

注

（1）陳致「「萬舞」与庸奏——殷人祭祀楽舞与『詩』中三頌」（『中華文史論叢』2008 年第 4 期）
（2）唐作藩『上古音手冊』（江蘇人民出版社、1982 年、158 頁、173 頁）
（3）楊福泉「「庸」字考釈」（『古漢語研究』1994 年第 4 期）
（4）曾憲通『長沙楚帛書文字編』（中華書局、1993 年、第 38 頁）
（5）李純一「試釈用、庸、甬並試論鐘名之演変」（『考古』1964 年第 6 期）

参考文献

于省吾『甲骨文字釈林』（中華書局、1979 年）
王輝『古文字通假字典』（中華書局、2008 年）
王祥「説虎臣与庸」（『考古』1960 年第 5 期）
落合淳思『甲骨文字辞典』（朋友書店、2016 年）
郭沫若『甲骨文合集』（中華書局、1978-1983 年）
許慎『説文解字』（上海古籍出版社、2007 年）
康殷『文字源流浅説』（榮寶齋出版社、1979 年）
高景成『常用字字源字典』（語文出版社、2008 年）
谷衍奎『漢字源流字典』（華夏出版社、2003 年）
佐々木研太「瑠璃河 M1902 出土作册睘卣考釈」（『両周金文研究会会報』第 3 号、2025 年）
白川静『字統』（平凡社、1984 年）
沈長雲「琱生簋銘『僕墉土田』新釈」（『古文字研究』第 22 輯、中華書局、2000 年）
曾憲通『長沙楚帛書文字編』（中華書局、1993 年）
孫小文「浅談西周早期甬鐘的起源」（『大衆文藝』2010 年第 4 期）
朱駿聲『説文通訓定聲』（武漢市古籍書店、1983 年）
周斌『古代漢語字典』（商務印書館國際有限公司、2005 年）
趙誠『甲骨文簡明詞典—卜辞分類読本』（中華書局、1988 年）
中国社会科学院考古研究所『殷周金文集成』（中華書局、2007 年）
陳初生『金文常用字典』（陝西人民出版社、2004 年）
唐作藩『上古音手冊』（江蘇人民出版社、1982 年）

楊慎『升庵経説』（商務印書舘、1936 年）
李学勤編『字源』（天津古籍出版社、2012 年）
李景林「先秦儒学「中庸」説本義」（『吉林大学社会科学学報』1994 年第 4 期）
李純一「試釈用、庸、甬並試論鐘名之演変」（『考古』1964 年第 6 期）
李純一「庸名探討」（『音楽研究』1988 年第 1 期）
Baxter, William H. & Laurent Sagart, Old Chinese: A New Reconstruction, Oxford University Press, 2014